

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Note on Some Cases of Transhumance among the Fulbe Jenngelbe of Senegal

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小川, 了 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004504

フルベ族, ジェンゲルベ・グループの
移牧に関する事例報告

小 川 了*

Note on Some Cases of Transhumance among the Fulbe-Jennelbe of Senegal

Ryo OGAWA

This is a brief follow-up study to complete my article, *Some Problems of the Pastoralism and Agriculture of the Fulbe-Jennelbe of Senegal: A Case Study*, published in the Vol. 5, No. 3 of this Bulletin, in which the ecological context of Fulbe-Jennelbe society was presented together with a description of Jennelbe subsistence economy, and an analysis of their agricultural and pastoral problems.

In this study, six cases of Jennelbe transhumance are described. The term “transhumance”, usually designates a kind of pastoralism found in Europe and Central Asia; i.e., “transhumance” means seasonal and “vertical” movements of the agrico-pastoral people. However, the most important and fundamental aspect of transhumance is, in my opinion, the regular and seasonal movement of an agrico-pastoral society between two different climatic regions or sub-regions. Thus, as far as the above mentioned condition is fulfilled, the term “transhumance” can be employed even if the movements are “horizontal” rather than “vertical”.

Movements of the Jennelbe are regular, seasonal, and “horizontal”, but often they move to regions climatically different from their own permanent villages. So “transhumance” is employed in this study.

Also described are some artifacts of importance in Jennelbe transhumance.

* 国立民族学博物館第3研究部

- | | |
|-------------------|---|
| I. はじめに | 5. E, 女, 30才 |
| II. 移牧とは | 6. F, 男, 26才 |
| 1. その定義をめぐって | IV. 物質文化についての考察 |
| 2. ジェンゲルベ・グループの移牧 | 1. 家 (<i>suudu/cuudi</i>) |
| III. 事例報告 | 2. ベッド (<i>mirde/mirde</i> 又は <i>leeso/leese</i>) |
| 1. A, 男, 36才 | 3. ニワトリを運ぶためのカゴ (<i>sunj-sunj gertoode</i>) |
| 2. B, 男, 65才ぐらい | 4. 浅井戸 (<i>buandu/bulli</i>) |
| 3. C, 男, 65才ぐらい | V. おわりに |
| 4. D, 女, 50才 | |

I. はじめに

筆者は先に、セネガルにおけるフルベ族の一グループ、ジェンゲルベの自然環境と彼らの生業に関して民族誌的な記述をおこなった [小川 1980b]。その中で、筆者はジェンゲルベ・グループの人々が乾季におこなう移牧に注目し、若干の考察を加えた。移牧に関する記述は統計的資料にもとづくものであったが、移牧をする人各々が、実際にどのような移動をし、また、乾季の間、移動地での生活をどのように営んでいるかについては十分にふれることができなかった。本稿は具体的な事例を報告することによって、前稿を補足することを目的としている。

前稿で詳述したとおり、ジェンゲルベ・グループの人々が乾季におこなう移牧は大きくわけて三つの地域でなされている。彼らが恒常的な村を設定しているジョロフ地方内部で、短距離の移動をする人、農耕民、ウォロフ族が多く住むバオル地方に移動する人、そして、シン・サルーム地方の Kaolack を中心とした大都市に移動する人々であった。したがって、本稿の事例報告では上記三つの地方、それぞれについて詳しい報告をすることが望ましいことは当然である。本稿でとりあげる事例のうち、ジョロフ地方で移動した人々については、実際に移動の現場に一部同行もし、また、キャンプを設営して後も実地におもむいて調査をすることができた。しかしながら、シン・サルーム地方、および、バオル地方に移動した人々について、実地調査をする目的で行動を開始した矢先に不測の障害により調査を中断せざるを得なかった。したがって、本稿ではバオル地方に移動した人々に関する事例は欠如しているし、また、シン・サルーム地方に移動した人に関する事例は聞き取り調査によっていることをあらかじめことわっておきたい。資料が完全でないことははなはだ遺憾であるが、しかし、本稿で示す事例で、ジェンゲルベ・グループの移牧に関して、少なくともその基本的

な形だけは理解されると考えている。

記述にあたっては、第Ⅱ章で移牧という牧畜形態について少しく考察を加え、第Ⅲ章で事例報告を試み、第Ⅳ章でジェンゲルベ・グループの移牧中の生活において、特記すべき物質文化について若干の考察を加えた。

Ⅱ. 移 牧 と は

1. その定義をめぐって

「移牧」が *transhumance* の訳語であることは周知の事実である。しかし、移牧という語によって表現される生活形態がどのようなものを指すか、ということについては、それをを用いる人々の間でいささかの差異を生じているようである。牧畜という人間活動の一部をなす移牧について、筆者がここで論陣をはるつもりはない。しかし、本稿ではどのような意味内容において、筆者がこの言葉を用いるのか、それを明確にしておくことが、この際必要であろうと思われる。

谷泰は人間と家畜動物というインター・スペシフィックな生物間での関係行動を論じた一文中で、トランスヒューマンスについて次のように規定している。つまり、トランスヒューマンスとは「人為的に誘導された（家畜群の）移動のこと」であり、より具体的にいえば、「季節によって、牧地の草が枯れたり、雪で被覆されるために、他の緑の牧地を求めて人為的に（家畜が）移動させられる」ことである [谷 1976: 16]。

谷はこの論考の中で移牧をことさら問題にしているのではなく、したがって上記のような短い規定を与えるにとどまっているが、この簡単な定義の中で重要なことは「人為的に」という点である。つまり、「移牧」といった場合、まず、生物としての数種の家畜動物が、自然に、生来的にもつ移動習性のことをいっているのではなく、人為的に家畜を移動させることなのである。これは自明のことかもしれない。しかし、「移牧」に対比して「遊牧」ということを考えた場合、少なくとも遊牧の初期の段階にあっては、動物が生来的にもつ移動習性に人間のほうがあわせて行動するということはありえた¹⁾。そのことを思えば、移牧が人為的なものだという基本的な前提を知

1) 今西錦司は「遊牧論」の注釈の中で次のように述べている。

「(……) トナカイのほうで動くから、人間のほうでもこれについて動かなければならなくなる。トナカイが遊牧しているから、人間のほうでもこれについて遊牧しなければならなくなるのであって、『かれらの生活はけっして人間の恣意によって変化することはできないのである。かれらはまったくかれらの伴っている家畜の意志にしたがって行動する。そこに遊牧民族の本質がある』と『家畜文化史』の著者もいっている。」[今西 1976: 261-262]

っておくことも無益ではあるまい。

さて、以下に先学によるトランスヒューマンズの定義をいくつか列挙し、それらをもとに筆者が本稿で用いるトランスヒューマンズの意味内容を明確にしたい。

トランスヒューマンズという語はスペイン語の *transhumancia* を嚆矢とし、その後、フランス語を経て [KRADER 1955: 302]、英語、ドイツ語にとり入れられたという。つまり、原義的にはトランスヒューマンズとはヨーロッパの農牧民の間での牧畜形態を指すものであった。

ピレネーや、アルプス山脈付近の農牧社会では、ヤギ、ヒツジ、ウシなどの家畜群を夏の間は高地の牧野で放牧し、冬になると低地につれもどすという。夏、高地での放牧にあたって、それぞれの家畜群は専従の牧夫にまかされる。牧夫以外の人々は低地で農業に従事する。いずれにせよ、ここで顕著にわかることは、トランスヒューマンズとは季節の変化にもとづく定期的な移動である、ということと同時に、高地、低地という上下の移動であるということである。実際、トランスヒューマンズとは定期的な上下の移動として諒解されることが多い。たとえば、トランスヒューマンズという語を精確に用いようとする de Planhol は、トナカイ牧畜をするラップ人が、冬は内陸部、夏は海岸部というように季節によって定期的な移動をしていることに対して、*transhumance* とはいわずに、*migration* という語を用いている [DE PLANHOL 1962: 315]。つまり、ラップ人の移動は上下のそれではないからである。

de Planhol はまた、イギリスでは牧畜民の移動をもってすべてトランスヒューマンズと呼ぶ傾向があることを批判している [DE PLANHOL 1961: 308]。実際、イギリス人である Stenning はトランスヒューマンズを季節的な、南北の移動として考えており [STENNING 1957]、この Stenning の記述にもとづき、Spooner は *transhumance* と *migration* を次のように定義している。

Transhumance: Movement of nomads between summer and winter pastures.
Migration: Irregular displacements of an annual nomadic cycle. [SPOONER 1973: 42]

この定義をみると、先に記したトランスヒューマンズの定義よりは少し拡大されていることがわかる。つまり「上下」という概念がとりはらわれているのである。

さまざまな定義を挙げて文章を煩雑にすることが目的ではないが、もう一度、de Planhol にもどると、彼は Hofmeister がトランスヒューマンズを語義的、方法論的に定義したことを記し、Hofmeister はその中で、トランスヒューマンズといった場合、基本的なことは、移動先の土地の気候が恒常的な住居をかまえた土地の気候と異

なること、というのを第一義にしているという [DE PLANHOL 1962: 301 & 305]。したがって、高地、低地という上下の差は第二義的に考えてもよさそうである。

上記のことから、筆者は移牧（トランスヒューマンス）を次のような定義において用いることにしたい。

1) 対 象

ヨーロッパやアジアの半農半牧の社会、および、その他の地域で、牧畜をみずからの主たる生業としながらも、牧畜業だけでは生計維持が困難なため、農耕をもおこなう人々の社会で、農耕をおこなう土地に恒常的な村落を形成している、というような社会。

2) 形 態

上に述べたような社会では、季節によって、恒常的村落のある場所での牧畜が困難になるため、村落住民の一部、あるいは全部が家畜を伴い、水と飼料のある場所に移動すること。ヨーロッパやアジアのように、季節によって高地、低地という高度差を利用する場合もあるし、また、平面的に南北の差を利用することもある [cf. KRADER 1955: 302; SPOONER 1973: 42; RUDDLE 1979: 825-826]。

2. ジェンゲルベ・グループの移牧

セネガル、ジョロフ地方に住むフルベ族、ジェンゲルベはウシ牧畜を主生業としながら、雨季には農耕もおこなう人々である。彼らはジョロフ地方に恒常的な村落を形成している。彼らの生業活動については前稿に詳述したとおりであるが、乾季にはいると彼らは移牧をおこなう。その形態についてもすでに記したが、ここで本論にはいる前に、ジェンゲルベの移牧について重点的に概略を再記しておきたい。

ジェンゲルベは移牧に際して、村落構成員すべてが移動するのではない。普通、壮年の男、その妻、子供が中心となり、家族単位での移動が多い。老人、および何人かの壮年、乳離れした子供は乾季の間も村に残ることが多い。また、移動にあたって、家畜すべてを伴って移牧することもあるが、村に居残る家族のために数頭のウシやヤギなどを残しておくこともある。このように、移牧につれださず、村に残しておくウシのことを *curaadi* とよんでいる。

さて、現在、ジェンゲルベ・グループの人々が移牧する場所は大別して三つの地域にわけて考えることができる。(1) ジョロフ地方内部。(2) バオル地方の農耕民、ウォロフ族が多く住む村々。(3) シン・サルーム地方の大都市、Kaolack などの周辺。

前稿では、これらの三地域に移牧する人々の間で、乾季の間の経済活動には違いが

あることを詳述した。ジョロフ地方内部で移動する人々は、農耕民ウォロフ族との間に何らかの交換活動をおこなうことは一切求めていないのに対し、バオル地方に移動する人々はウォロフ族との間に補完的な交換形態を成立させている。また、シン・サルーム地方の大都市、Kaolack などに移動する人々は、牛乳とトゥジンビエなどの穀物を貨幣を仲介にして「交換」をしているが、しかし、農耕民の畑に牛糞をもって施肥をし、その代り、村の井戸を使わせてもらおうといった相補的な関係はもはや維持していない。前稿の論旨は、かつては牧畜民フルベ族（ジェンゲルベ・グループ）と農耕民ウォロフ族との間には、現在、バオル地方に移牧する人々に見られるように、牧畜と農耕という二つの生業間での相補的な共生関係が、一般的に見られたであろうが、貨幣経済が一般化するに伴って、その共生関係が崩れつつある、ということであった。しかも、その共生関係が崩れる時、牧畜民にとって不利な形勢に進みつつあると考えられる。

それはさておき、こうして乾季をすごし、翌年の雨季に入る直前、ジェンゲルベの人々は往路と同じルートをたどってジョロフ地方の村にもどり、雨季到来とともにトゥジンビエの耕作に従事するのである。

Ⅲ. 事例報告

1. A, 男, 36才

A はジョロフ地方の町、Dahra の北、約 8 km にある Denjilly という村に住んでいる。両親と、自分の妻 3 人、子供達と一緒に拡大家族を形成しており、雨季にはトゥジンビエの耕作をおこなう。

1979年から1980年の乾季²⁾にあたり、Denjilly 周辺には早くから牧草がなくなっていたが、父親が盲目であるため、なかなか村を離れられず、移牧に出る時期を遅らせた。

移牧のため村を出たのは1980年2月4日である。両親とA自身の子供はすべて村に残し、自分と妻3人、および、後に述べるウシ飼いのための牧童1人、ヒツジ飼いの牧童1人を雇い、計6人で出発している。村に残った両親と自分の子供のために、メスの成ウシ3頭、仔ウシ3頭、ヒツジ1頭、乳離れした仔ウマ1頭、それにロバ2頭を残した。村に残したウシ (*curaadi*) は A の所有になるものではなく、母親が独自に所有するものである。

2) ジェンゲルベ・グループの季節暦については [小川 1980b: 680-681] を参照。

A は移牧にあたり、はじめバオル地方のウォロフ族の村に行きたいと思っていた。しかし、男手は自分一人であり、一人では深井戸での水汲みが困難なため、同じジョロフ地方内部で動力揚水ポンプ施設のある Lindé に行くことにした³⁾。

A が移牧につれて出た家畜は成ウシが約60頭、乳離れしない仔ウシが9頭、ヒツジ約30頭、少数のヤギ、それに荷車を引かせるためのウマ1頭である。ウシ群の中には種ウシは1頭しかいない。種ウシの他には1979年の雨季に去勢した去勢ウシが4頭いる。

さて、2月4日に Denjilly を出て、最終的な目的地は Denjilly の南東、直線距離で約45 kmにある Lindé であるが、A は最初の停泊地として、Denjilly から北東へ9 km ほど行った Baali Roto という同じフルベ族の村の近くに向っている。Baali Roto の村の井戸から約500 m 離れた地点に第Ⅳ章で詳述する木の枝を使ったベッドを2台作り、停泊している。停泊地の目印になるように丈の高い *golteeki* (*Balanites aegyptiaca*) を選び、その下にベッドを設営している。A 自身とその妻3人(33才、27才、16才)、それに牧童2人の計6人であるが、ベッドは2台だけで、牧童2人は直接地面に寝る。ベッドのすぐ近くにヒツジを夜間、囲っておくための囲いを作っている。囲いは *Balanites aegyptiaca*, *Acacia raddiana*, *Acacia seyal* など、トゲの多い木の枝木を切ってきて、円形に並べ、囲いとしている。この囲いは *geddu baali* (ヒツ

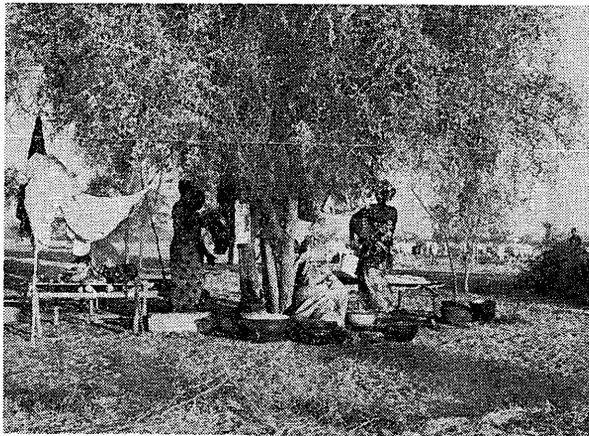


写真1 *Balanites aegyptiaca* の下にベッド2台を設営。夕方、ウシが放牧からもどり、これから搾乳されるところ。(1980年2月9日撮影、Baali Roto の近く)

3) バオル地方に移牧した場合、家畜に与える水はウォロフの村にある深井戸で汲むことは前稿に詳述した。また、深井戸での水汲みの労働量、動力ポンプ施設の問題点などについては、「牧畜民フルベの生活と水」[小川 1980a] に記したので参照されたい。

ジを入れる囲い)と呼び、女が作る。木の種類についてはトゲがあることが重要なだけで、特にきまりはない。ウシ群については囲いは作らず、ベッドを設営した場所から 100 m 近くも離れた場所で夜営させるようにしている (写真 1 参照)。

ウシの搾乳は早朝と、夕方、放牧からつれもどされて、つまり、一日 2 回おこなう。妻達が搾乳するが、第三妻はみずからの所有になるウシを未だ 2 頭しかもっておらず、搾乳はほとんどせず、他の二人の共妻が搾乳するのを手伝うだけである。この乳は生乳として飲んだり、夕食のトウジンビエにかけて食べるほか、酸乳にもするが、売ることとはなく、また、ウォロフ族との間で穀物と交換することもない。すべて自家消費である。但し、現在の停泊地、Baali Roto は A が居住する村、Denjilly から 9 km しか離れておらず、そのため一日おきぐらいに A の母親が Denjilly からバケツをたずさえて酸乳をもらいに来る。

乳、および乳製品を売って現金を得る、という生活ではないので、トウジンビエ、米などの穀物、および、茶、砂糖などの日常必需の食料を買うためにはウシを売らなければならない。A は時々、2 オウシを Dahra までつれてゆき仲介人に売った後、得た金で穀物、茶、砂糖などを買う。ちなみに、Dahra の市場で、米 100 kg 入りの一袋は 9000フラン CFA、トウジンビエ 100 kg 入りの一袋 4500フラン CFA、茶は 100 g で 250フラン CFA、砂糖は 1 kg で 450フラン CFA である (1980 年 2 月の時点)。米は昼食に食べ、トウジンビエは夕食に食べる。米がある限り、昼食を作るが、米がなくなったら昼食は抜くことが多いという。

さて、前稿において、ジェンゲルベの人々は雨季の放牧にあたっては自分達自身で家畜群の管理をおこなうのに対し、乾季の移牧中は放牧管理のための牧童を雇うことが多いことを記した。放牧管理をおこなう牧童を一般に *gaynaako*/(複)*aynaabe* と呼ぶのに対し、金銭契約で雇う牧童のことは *sardi* とよぶ。ジェンゲルベの人々は *sardi* として普通、トゥクルール族、モール族、およびフルベ族の奴隷の人々を雇う。

A は *sardi* を二人雇っている。ウシの放牧管理に一人と、ヒツジの放牧管理に一人である。二人ともトゥクルール族であり、17~8 才であった。A はウシ群の牧童には毎月 2,750フラン CFA を払い、ヒツジ群の牧童には 3,000フラン CFA を支払う。かつては月給制ではなく、契約期間の終りにメス 2 オウシ 1 頭を与えるのが一般的であったが、現在このような報酬方法はなくなったようである。ウシに比べ、ヒツジの方が数が少ないのに、ヒツジの牧童がより多くの給料を得ているのは次のような理由による。ヒツジ群は散開しやすく、常に監視をしていなければならない。また、たとえ仔ヒツジを停泊地にとどめておいても、放牧に出た親ヒツジ達はみずから停泊地に

もどりつくことはできず、牧童がうまく誘導せねばならない。つまりウシ群の管理より手間がかかるのである。さらにウシの牧童は一度ウシ群を放牧に出してしまえば、それほどの手間はかからないので昼、昼食をとりて停泊地にもどってくる。ヒツジ群の牧童は夕方まで食事はとらない。

sardi は放牧管理のために特に雇われた人であり、したがって深井戸での水汲みをする義務は彼らにはない。家畜に飲ませる水を深井戸で汲むのはA自身とその妻二人の仕事である。3人の妻のうち一人は井戸には行かず、停泊地にとどまって見張りをすると同時に、炊事の準備をする。水汲みは毎日おこなう。搾乳を終えた後、全部の家畜に水を飲ませ終えるのは午前11時から12時ぐらいまでかかる。その後、家畜群は夕方まで *sardi* の手に任せられるわけである。A は *sardi* 達には上記の月給を支払うほか、毎日の食事と茶代をすべて負担する。これは *sardi* を雇う場合、一般的な形のようなものである。

筆者が Baali Roto の停泊地に A を訪ねたのは2月9日であり、Baali Roto の村に一泊した後、翌10日も一日を共に過ごさせてもらった。A 達が Denjilly を発ってから5日後であった。A 達はその地にさらにしばらく停泊した後、Som, Thiargny を経て、最終目的地 Lindé に向うということであった(図2, p. 147を参照)。

2. B, 男, 65才ぐらい

B は Dahra の南約 18 km に位置する村, Nguely に住んでいる。妻は一人、娘達はすべて婚出しており、男の子供も Nguely には住んでいない。B はフルベ族の伝統について豊富な知識をもっている人物として、人々の信望も厚い。数年来、眼をおかされており、現在は盲目に近い状態である。

移牧に関する事例報告として B をとりあげたが、実は B 自身は村に残っている。移牧につれ出されたのは彼の家畜なのである。乾季の間、B の家畜を移牧に出し、管理するのは B の奴隸 (*maccudo*) の男である。つまり奴隸の男は B の *sardi* として働いているのであるが、B とこの奴隸との間には単なる雇用主と被雇用者という関係を超えたものがあり、しかも、B はこのような「移牧」の形をすでに十数年来とっているとのことなので、ここに事例として報告するものである。

B はこの奴隸が幼い時からよく世話をし、奴隸が成年に達した時、婚資とすべきウシ2頭を奴隸に与え、妻を娶らせた。この奴隸にとって、B はいわば父がわりの存在である。このような深い信頼の関係があるからこそ、十数年来、B 自身は移牧に出ることはなく、乾季の間の家畜管理を完全に奴隸に任せているのである。

1979年～1980年の乾季についてみると、村に残る B のもとにはウシ11頭が残され、その他の家畜は奴隷の手にゆだねられた。奴隷は一人で B の家畜を伴い、同じジョロフ地方内部の村、Sooyndé Daam に移動した。Sooyndé Daam は動力揚水ポンプ施設のある村である。この奴隷の男は、Sooyndé Daam に移牧している間、ウォロフ族の畑に牛糞の施肥をすることもなく、また、ウォロフ族との間で牛乳とトウジンビエの交換をすることもない。

奴隷が移牧に出ている間、B は村に残っているわけであるが、毎月 10,000 フラン CFA を Sooyndé Daam にいる奴隷のもとへ人を使って届けている。これは B の *sardi* としての月給である。先の事例 1 でみた *sardi* の給料に比べると三倍以上の高額であるが、これは食事こみか、食事別かの差と考えられる。B の奴隷の場合、たった一人で移牧しており、食事は Sooyndé Daam の知人の家で賄ってもらっているというが、当然、食事代を支払わねばなるまい。

この奴隷は月 10,000 フラン CFA の給料で生活が成り立たない場合、自分が管理している B のウシを売って現金を得ることも許可されているという。それほど B と奴隷との間の信頼の度は深いということである。

さらに興味深いのは、奴隷はその妻を Sooyndé Daam には伴っていないのだが、妻はやはり B に属するウシ 3 頭をつれて、一人で Kaolack に移牧している。この妻は B のウシから得た牛乳を Kaolack の市場で売り、そうして得た金は完全に自分のものとして使ってよいのだという。また、この奴隷自身、数頭のウシを所有しているが、これらのウシは雇い主 B のウシと一緒にまとめて管理されているのではなく、Nguely に残留する兄のもとに残している。これは大変興味深いケースである (図 2, p. 147 を参照)。

3. C, 男, 65才ぐらい

C は事例 1 で示した A と同じ村、Denjilly に住んでいる。但し、A が住む屋敷からは 800 m ほど離れたところに、C の拡大家族で屋敷を形成している。拡大家族の構成を図示すると図 1 のとおりである (図 1)。C, および、a には図に示された以外にも子供があるが、本稿には直接の係りはないので省略してある。図のうち、▲, ●はすでに死亡したものであり、▲, ●は乾季の間も移牧には出ず、Denjilly に残っている人々を示す。△, ○の記号が移牧に出た人々を示している。なお、⊖は婚出して Denjilly には居住していない人々である。

図 1 からわかるように、この家族で移牧に出たのは C を筆頭にして、a から g ま

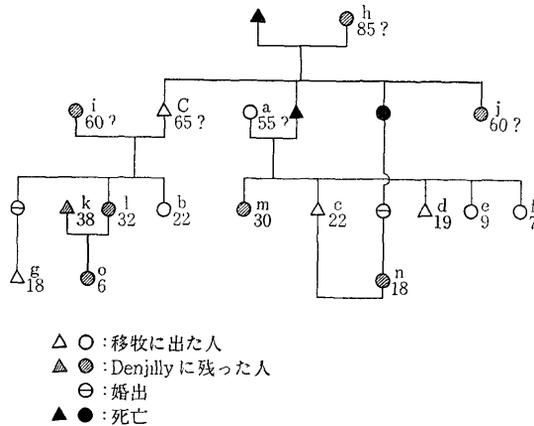


図1 Denjilly 在, C の拡大家族の構成

での8人である。但し、gはその母が結婚により Denjilly を離れ、別の村に住んでいるのであるが、母方の祖父にあたる C が移牧している間、C 達と一緒に暮らしているのである。Denjillyに残ったのは h から o までの8人である。

フルベ族は結婚に際しては夫方居住をすることからして、l と結婚した k が Denjilly に居住しているのは奇異に思われるが、それは次の理由による。l は初め、別の男と結婚したが、離婚し、Denjilly にもどった。そこで別の村から来ていたやはり離婚歴のある k と親しくなり、k の両親がすでに死亡していたことから、二人は夫婦として l の家で共に暮らすようになったのである。

a の夫は C の弟で、C より2才年下であったが、1976年、念願のメッカ巡礼の団体旅行に参加したまま不帰の人となった。メッカで死亡したものとみなされている。a はその後、再婚はせず、長男の c を中心に暮らしている。なお、c は図1からわかるとおり、父方の交叉イトコの娘と結婚している。

さて、これら移牧に出た人々のうち、最初に村を去ったのは c である。1979年11月26日の朝、家畜を伴い、一人で Denjilly を発ち、夕方、26km ほど南下した Nguely に到着した。その時、母親、およびその他の家族のためにウシ5頭とヒツジを残しておいた。c は他の人々が合流するまで Nguely の親戚の家に寝泊りしていた。

1980年1月末、C をはじめとする7人が、すでに Nguely にいる c のもとに合流した。Denjilly に残る家族のもとにはヒツジ数十頭を残したのみで、ウシはすべてつれてきている。Denjilly には枯草もほとんどない状態であるが、わずかに 26 km 南下しただけの Nguely 周辺には枯草が多く、乾季を過ごすに充分と思われるので、

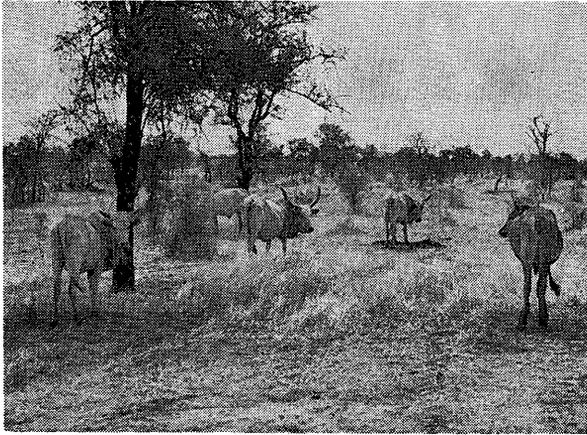


写真2 1979年～1980年の乾季, Nguely の付近には枯草が多くあった。
(1980年2月12日撮影, Nguely の近く)

Nguely への移動を決めたという (写真2 参照)。Nguely には親戚が多いので何かと好都合であるという。

C 達すべてがそろって後, Nguely の井戸から約 1,200 m 離れた場所に, 乾季を過ごすためのキャンプ, *wiitnde* を作っている (写真3 参照)。(住居の詳細については第四章に記す。)

彼らは移牧にあたり, *sardi* を雇うことはなく, 自分達で管理している。また, Nguely には深井戸があるだけで, 動力ポンプ施設はなく, そのため毎日, 深井戸での水汲みに従事する。さいわい, c, d, g という三人の青年の人手があり, 問題はな

い。午前中は主に, ヒツジ, ヤギ, ロバ, ウマ (2頭) のための水汲みをし, 成ウシ, および仔ウシには午後3時頃から水を飲ませている。成ウシは朝の搾乳後, 枯草の多いところにつれてゆき, あとは放っておいてよい。夕方, ノドが渇くと, ウシ達はみずから井戸に行き, 水を汲んでもらうのを待っている。仔ウシは日中, 成ウシとは別の場所で放牧されるか, キャンプにひきとどめられている。放牧管理に一日中, つき添う必要があるのはヒツジ,

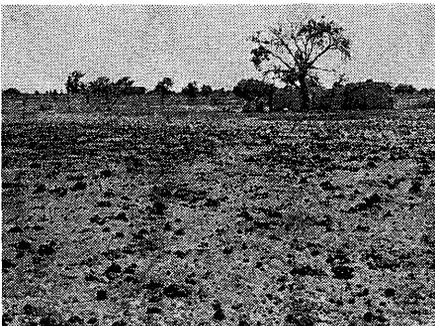


写真3 C の *wiitnde* (乾季のキャンプ地)。
夜間, ウシは家のすぐそばで休む。
早朝, ウシが放牧に出た直後。
(1980年2月13日撮影, Nguely の南方約 1 km)

ヤギの群だけであり、この管理のためには3人の青年のうち一人が順番であたっている。

Nguely 付近にはウォロフ族が住む集落もあるが、C 達はウォロフ族の畑に牛糞の施肥をすることはない。牛乳は時々、ウォロフ族に売ることもあるが、ほとんどは自家消費である。

C は穀物、茶、砂糖を買う必要上、2月の初めに、老いて死期の近いメス・ウシを1頭売っている。なお、C の拡大家族全部で所有するウシの数は約90頭である（図2，p. 147 を参照）。

4. D, 女, 50才

D は女性である。Dahra から西に 10 km 離れた村、Mboussoobé に住んでいる。D の夫は別の村に住んでおり、D は夫の第二番目の妻である。本来なら夫が住む村に暮らすのが当然であるが、第一妻との折り合いが悪く、D の息子夫婦が住む Mboussoobé で暮らすことの方が多い。

D は息子 (31才) 夫婦と、離婚して Mboussoobé にもどっている娘 (33才) との4人で、1979年11月の初めにシン・サルーム地方の大都市、Kaolack に向けて移動している。(前稿において、Mboussoobé の人々はほとんど皆、Kaolack に移牧していることを記した。)

家畜は D 自身に属するもの、および、息子夫婦に属するものすべてを移牧につれ出している。

Kaolack では牛乳を酸乳にした状態で市場で売る。放牧管理については、Kaolack から来た人々全員が共同で雇う一人の *sardi* に任せている。*sardi* にはウシ1頭につき、毎月100フラン CFA の金を支払っている（図2，p. 147 を参照）。

5. E, 女, 30才

E はその夫の第一妻で、子供は二人ある。E は夫と子供二人を Mboussoobé に残し、E 自身に属するウシ2頭のみをつれて Kaolack に移牧に出た。牛乳を売って生計を立てねばならないが、2頭のウシから得られる牛乳では量は多くはない。そこで、粉乳を買い、水でとき、それに牛乳をまぜて、量を水まししてから酸乳にして売るという。

このように女性が単独で、少数のウシをつれて移牧することはそれほどめずらしくはないようである。彼女らは牛乳を売って生計を立てることが絶対の条件であるので、

Kaolack などの大都市に向うのが普通である (図2を参照)。

6. F, 男, 26才

F は Dahra の南方 18 km ほどにある村, Nguely に両親とともに住む独身男性である。筆者が調査をした1979~1980年の乾季には移牧には出ず, 両親と共に村に残っていた。

ここで報告するのは, 1978年~1979年の乾季における移牧の事例である。本来ならば, F の父親をもって, 報告の対象にすべきであろうが, F から聞きとり調査をしたため, F を対象にして記す。

1978年~1979年の乾季にあたり, F は両親と, 計3人で, シン・サルーム地方, Kaolack の北東 62 km にあるウォロフ族の村, Mbos に移牧した。Nguely を出たのはイスラム暦の最後の日とされる *Tamkaret* の直後というから, 11月末から12月

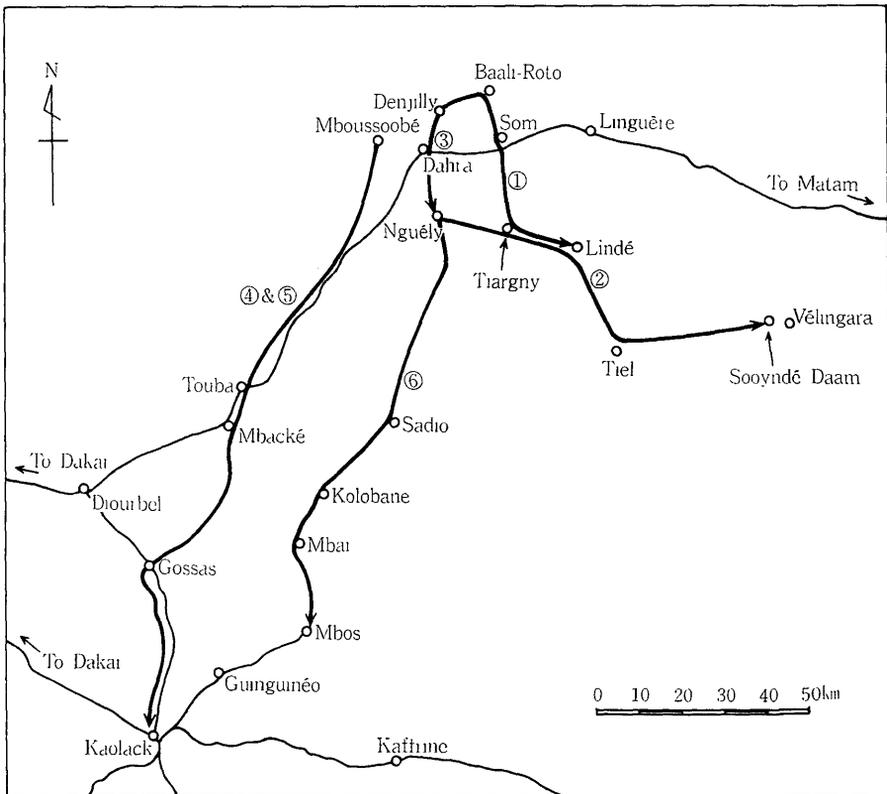


図2 移動経路を示す図。番号は事例報告の番号に相応

の初めであろう。Nguely から直線距離にすれば約 100 km に位置する Mbos まで、途中で四泊し、五日目に到着している。一日平均、約 20 km の移動である。

家畜はすべてをつれて行った。Mbos では *sardi* は雇わず、F 自身が放牧管理にあたった。Mbos には動力ポンプ施設があるため、水汲みはする必要がなく楽であった。なお、Mbos の動力ポンプ施設では家畜に水を飲ませても無料であるが、Mbos と Kaolack の中間に位置する町、Guinguinéo では動力ポンプ施設で家畜に水を飲ませるには、1頭につき、毎日10フラン CFA を支払わねばならない。

F 達家族は Mbos 在住のウォロフ族の一家と旧知の間柄にあり、例年、そのウォロフ族一家の畑（収穫後）に家畜を放し、主として落花生の茎や葉などを家畜の飼料として得るかわりに、牛糞による施肥をする。さらに、酸乳とトウジンビエの直接交換もする。

しかし、牛乳と穀物の交換だけでは生活が成り立たず、毎日の茶、砂糖、さらに米や干し魚などを買うための現金が必要であり、そのために1978～1979年の乾季の間に5頭のウシを Kaolack にて売った。オスの2オウシを2頭（1頭、25,000フラン CFA）、メスの2オウシ2頭（1頭、35,000フラン CFA）、そして、年とったメスの成ウシ1頭を50,000フラン CFA の値段で売った。総計すると170,000フラン CFA をウシの売り渡しで得ている。

1979年～1980年の乾季については、1979年の雨季、雨が不順であったため、シン・サルム地方もトウジンビエ、落花生とも不作であったというニュースを得たことと、逆に、F 達が住む Nguely 近辺には枯草が相当量残っており、移牧しなくても乾季を過ごせると判断したため、F 達一家は村に残った（図2，p. 147 を参照）。

Ⅳ．物質文化についての考察

この章ではフルベ族の物質文化の一端に触れたいと思うが、ここで取り扱う事項は特に乾季の間の移牧に係るものであり、フルベ族の物質文化全体に係るものではないことをおことわりしておく。たとえば、木製の食事容器、木臼、棒杵など、食事に係る道具は移牧にあたっても携行されるものであるが、これらは年間を通して重要なものであり、特に移牧の間に効力を発するというものではないので本稿では触れない。ここでは移牧をする乾季の間に使われる住居、ベッド、ニワトリを運ぶためのカゴ、および取水のための浅井戸について記す。

1. 家 (*suudu/cuudi*)

ジェンゲルベ・グループの人々はジョロフ地方に恒常的な村を形成しているわけであるが、ジョロフ地方において彼らは現在、ほとんどが農耕民ウォロフ族の住居形態をとりいれている。角形で、壁の部分と屋根の部分をはっきりと二つにわかれたタイプの家である。

しかし、彼らは伝統的には木の枝を編み、全体を草でおおった半球形の家を作っていた。角形の家、半球形の家ともに *suudu/cuudi* とよばれるが、現在、半球形の家は特に *suudu pulli* とよばれることがある。フルベ族はみずからのことを *pullo/fulbe* とよぶことは周知のとおりであるが、*pulli* という語は特に人里から離れた荒野に住むフルベに対して、半ば揶揄的に使われる言葉である。

ジェンゲルベの人々は乾季の移牧中、キャンプの設営にあたって、この *suudu pulli* を作る。つまり乾季の間、彼らは伝統的な住居形態にもどるのである。

住居の形を図示すると図3、および図4のとおりである(図3、4)。図3はもっとも基本的な形のもをを示している。天頂の部分 *puddel* とよび、出入り口を *dammugal* とよぶ。全体の大きさは人により多少の違いはあるが、普通、直径4m、中心部の高さは1.8mはあり、内部はかなり広い。家の中にはベッド2台のほか、牛乳容器 (*la'al/le'e*) を置く台 (*kaggu*) が必ず設営されている。家の中央部には地面の上に直接、枝木や乾燥した牛糞を用いて炉が設置される。この炉は炊事用ではなく、夜、暖をとったり、茶をわかすためのものである。

図4は図3のものより少し拡大、改良されたもので、家の出入り口の部分に水ガメやその他の道具を置くと同時に、家屋内部の目隠しの機能も果す部分がついている。この部分を特に *njabbitam* とよぶ。なお、家の天頂部、骨組をつくりはじめる部分を *puddel* とよび(写真4参照)、家の後背部(北側)の壁の部分を *su'yre suudu* とい

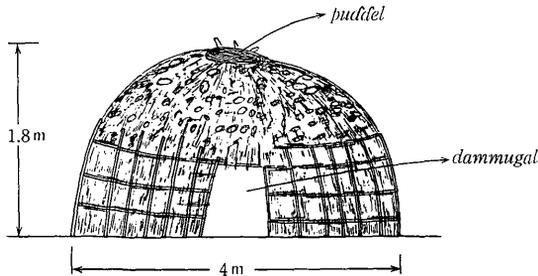


図3 *suudu pulli* の形、戸口は南に面する

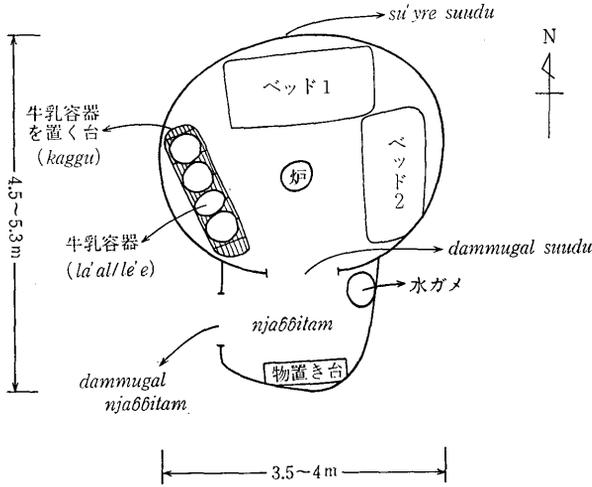


図4 suudu pulli 各部の名称と内部のものの配置

っている。セネガル河流域沿いに住み、フルベ語を話すトゥクルール族について辞書を作った Gaden は *suire/tuye* として、「家主、あるいは長男が死んだ時、死体を運びだすために使う（壁にあけた）すきま孔」と記しており [GADEN 1914: 189]、このことと関連があろう。

家を作るのは、木の枝切り、草集めも含めて、すべて女の仕事である。第三章、事例3でみた男 C の場合、移牧先の土地に三つの家を作っているが、C の弟の妻（図1における a）と、C の娘（図1における b）の二人によって作られた。家の骨組としては *gelooki* (*Guiera senegalensis*) の葉のついたままの枝を切りとり、家の天頂から、壁中央部にあたる部分までに使っている。骨組を結ぶためには、やはり *Guiera senegalensis* の皮をはいで、結び紐として使っている。枝木の太い方を天頂 (*puddel*) に集め、葉の多くついた枝先が下方に向うようになっている。しかし、中央部から下は、葉を除去した枝木で骨組をつくり、全体に *solbokko* (*Eragrostis tremula*) という禾本科の草をびっしりとかぶせている。このように壁部には草を使うが、材料としては *siirinko* (*Aristida longiflora*) でも、



写真4 フルベ族の家, suudu pulli の天頂部, *puddel*. (1980年2月13日撮影)

buudel (*Aristida stipoides*) でもよいという。図4でわかるとおり、家の戸口は必ず南向きである。(但し、*njabbitam* を作った場合、戸口そのものは西向きになる。) 牛乳容器を置く台 (*kaggu*) は西側におかれ、主人のベッドは戸口の正面、つまり北側におかれ、東側のベッドには子供が寝る。図4中、ベッド1では頭を西側におき、ベッド2では頭を南側に置いて寝る。

このような *suudu* は、材料となる木、草が充分にありさえすれば一日でできるという。

2. ベッド (*mirde/mirde* 又は *leeso/leese*)

フルベ族は普通、地面に直接寝ることはなく、必ずベッド状の台の上に寝る。第三章の事例1でみたような、牧童の男が直接地面に、しかも何も敷かず寝るというのは例外的なケースである。木の枝を切って組み、台状にしたものを *mirde/mirde* とよび、その上に敷きゴザを敷き、ベッドとして完成した形のを *leeso/leese* とよぶ。しかし、*leeso* という語は、敷きゴザ一般を指すこともある。

第三章の事例1、男Aが使っていたベッドを図示すると図5のとおりである(図5)。

二又になった枝木を2本ずつ対にし、二カ所、計4本を土中に埋め、それに横木をわたし、その上に縦木をわたす。その上に敷きゴザを敷いて寝る。全体の大きさは幅70~80cm、長さ170cm程度、地面からの高さ約35cmであり、幅は一人で寝るには充分であるが、二人で寝るには狭い。しかし、敷きゴザは移動の際、まるめて運ぶものであり、幅が狭い方が持ち運びに便利である。土中に埋める支木は前方に一カ

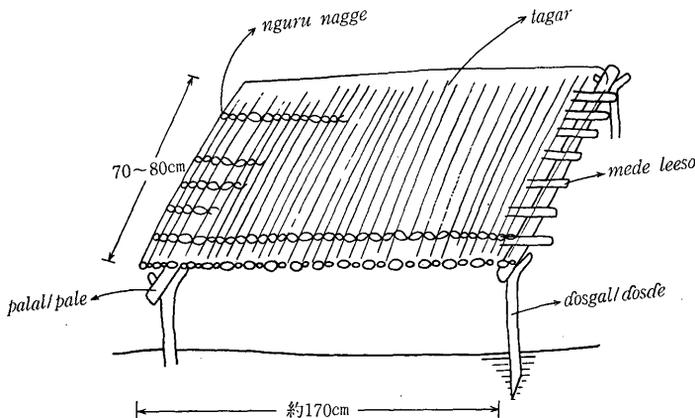


図5 乾季の移牧に際して使われるベッド (*leeso/leese*)

所、後方に一カ所の計二カ所しかなく、中央部では支えられていない。そのため、横木、縦木とも丈夫なものでなければならず、写真1 (p. 140) にみられるとおり、かなり太いものが使われている。なお、ベッドのまわりに4本の支柱をたて、蚊帳を吊っているが、乾季であるため蚊はおらず、夜の寒気よけである。

さて、敷きゴザであるが、これは *tagar* とよび、「ゴザ」という言葉から想像される目の細かいものとは少し異なる。これを作るのはフルベ族自身ではなく、フルベ族の奴隷 (*maccudo/maccube*) であり、フルベ族は奴隷から買いとる。 *ciidi/ciide* (*Acacia macrostachya*) の皮をはいだ枝木、直径 1 cm ほどのものと、直径 6~7 mm のものとを交互に並べ、ウシの皮で作った細紐で編んだものである。つくりとしては太い枝と細い枝を交互に並べたという点におもしろさがみられるくらいで、むしろ簡単なものである。(ものによっては太い枝と細い枝の変化もなく、全部一樣なものもある。) *Acacia macrostachya* の代りに *koyli/koyle* (*Mitragyna inermis*) を用いることもある。注意しなければならないのは、この *tagar* は移牧中の生活にだけ使われるということである。まとめて持ち運びが楽にできるという機能が重要なのであって、雨季、村に定住している時には用いることはない。

tagar を乗せる台にあたる部分を作るのは女性の仕事である。土中に埋める二又の木を *dosgal/dosde* とよぶが、この言葉はベッドを作る際に特有なものではなく、支柱一般を指す言葉である。*dosgal*、横木 (*palal/pale*)、および、縦木 (*mede leeso* という) とともに *golteeki* (*Balanites aegyptiaca*) を用いる。縦木について、男 A は5本しか使っていなかったが、本来は7本なければならないという。なぜ7本なのか、という問いには、それより少なければこわれやすいからだという答えしか返ってこなかった。しかし、フルベ族においては、「三」が男性を、「四」が女性を象徴する数字であり、男性原理(三)と女性原理(四)を合体したものが全的人間像をあらわす、ということを思えば、夫婦が共に寝る場所に「七」という数がみられるのはフルベ族の象徴体系と無縁ではないとみるのが妥当ではなからうか。

3. ニワトリを運ぶためのカゴ (*suny-suny gertoode*)

フルベ族はニワトリを家畜 (*jawdi*) の範疇にいれていないことは前稿に記した。しかし、ニワトリは手軽に食肉を得るためのものとして重要であり、ごく一般的に飼われている。移牧にあたって、彼らは多く、ニワトリも携行する。その際の容器として使われるカゴが *suny-suny gertoode* である。*suny-suny* という呼称はフルベ語独自のものか、あるいは外来語なのか不明である。*gertoode* はニワトリ、*gertogal* の複数



写真5 長距離の移動の途中、荷物をおろして休む。大, 小の *sung-sung gertoode* がみえる。(1979年11月30日撮影, Darou-Moustyにて)

形。) *kelli/kelle* (*Grewia bicolor*), あるいは *tadli/tadle* (*Combretum micranthum*) の細枝の皮をはぎ、長球形に編んだもので、編むための紐としては、先にはいだ皮を使う。ニワトリが逃げださなければよいのであって、目は粗い。ニワトリを出し入れするために特に扉をつくることもなく、目の粗いところをこじあけて出し入れする。このカゴにニワトリを入れ、ロバの背にのせて移動するのである。ニワトリの雛については、雛用に目の細く、小さいカゴを作る(写真5参照)。なお、シナノキ科の灌木、*Grewia bicolor* は、フルベ族にとって必須の家具である牛乳容器を置く台、*kaggu* を編むのに使われ、その他、フルベ族に伝統的な半球形の家を作る際の骨組としても使われ、さらに老人が使う杖にもなる利用度の高い木である。

4. 浅井戸 (*bunndu/bulli*)

ジェンゲルベ・グループの人々がジョロフ地方において、どのようにして水を得ているかについては別稿 [小川 1980a] で述べたが、その中で浅井戸の掘り方などについても触れておいた。その際、とりあげられなかった材質や、各部の名称などについて、ここで記しておきたい。

さて、浅井戸は移牧の期間中だけに使われるものではない。むしろ移牧に出る前、ジョロフ地方においてこそよく使われるものである。しかしながら雨季の間はジョロフ地方でも各所に表面水ができるので、浅井戸を作る必要はなく、乾季においてのみ使われるものである。また前稿において記したとおり、移牧に出る人々のうち、シン・サルーム地方の大都市、Kaolack などに移牧する人々は浅井戸を掘る。その意

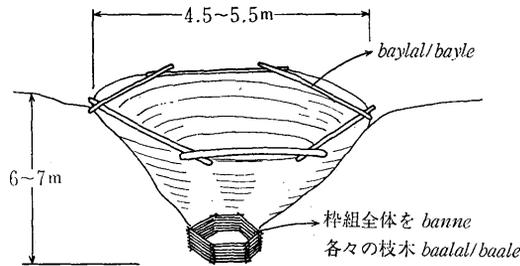


図6 浅井戸 (*bumdu/bulli*) の断面概念図

味で浅井戸はフルベ族にとって乾季に特有な物質文化のひとつである。

浅井戸の全体図、および各部の名称は図6のとおりである。浅井戸の底の部分に *banne* とよぶ幹組をつくる。 *dooki/dooke* (*Combretum glutinosum*)、あるいは *gelooki/geloode* (*Guiera senegalensis*) の枝木を使い、図6のように組みあげる。これらの木は水におかされにくく、長持ちするという。浅井戸の上部、土がくずれ落ちないように埋め込む幹木の本数は浅井戸開口部の直径の大きさによって異なるが、6本から10本ぐらいになることもある。木の材質は特に限定されていない。

水を汲む時には *koloy* とよぶ 3~4 m の竿の先に同じぐらいの長さの紐をつけ、紐の先に水桶を結びつけて釣り竿をあげるような動作で汲みあげる。水桶としては現在では手ごろな空カンが使われているが、かつては木の容器であった。この木の容器はことさら水桶用に作られたものではなく、ウシの乳をしぼる時に使う *birdugal/birdude* とよばれるものである。 *birdugal* はウシ牧畜民フルベ族にとってもっとも大切な道具のひとつであり、必ず、 *eeri/eere* (*Sclerocarya Birrea*) を用いて作るものである。いずれにしてもウシの乳をしぼり入れる容器を使って水を汲むという点は興味深い。

最後に浅井戸を掘る時に使われる木製のスコップ、 *lan/lapeji* について記しておく(図7)。 *lan* は図7のとおり、舟の櫂に似た形をした木製スコップである。全長は 150 cm 程度のもが多い。これはフルベ族自身が作るものではなく、木工を専門職とする階層の人々、 *lawa/laobe* が作る⁴⁾。材質は *bani/bane* (*Pterocarpus erinaceus*) である。図7に示したとおり、各部に名前がつけられているが、すべて *lan* という全体名称を含んだ複合語であることからわかるとおり、その部位に特有の語ではない。ちなみに *lan* の尾部からみてゆくと、 *laaci* とは動物などの尾のこと、 *Samba* は第二

4) フルベ族と *laobe* との間にある特殊な関係については「ラオベ・フルベ・ワンパーベ」[小川 1979] に記した。

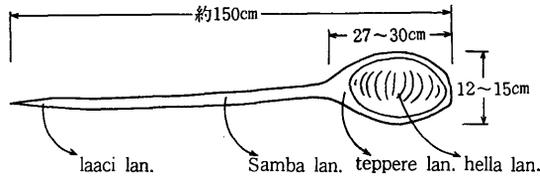


図7 浅井戸掘りに用いる木製スコップ (lan/lageeji)

番目に生まれた男子(次男)につけられる名称, *teppere* とは人間, および動物の踵のことである。*hella* は *hellude* (喝采するために手をうつこと) という動詞から作られた語と思われる。手をたたく時の掌の形状にたとえられたものであろう。柄の中央から少し先の部分に *Samba lan* という名がついていることにはいささかの意味合いがある。*Samba* とは男の第二子につけられる名前であることは先に記したとおりだが, 別稿で述べた [小川 1979: 58-59] ように, 男子につけられる総ての名前の中でもっとも高い価値が賦与されている。浅井戸を掘るにあたり, 土をかい出す時, 一方の手は *Samba lan* の部分にあてられ, 当然, ここに最大の力がかけられる。このことと, そこに *Samba* という名がついていることは無関係ではないだろう。

V. おわりに

本稿の第II章において, 筆者は移牧という語の意味するところについて考察を加え, 先学によるいくつかの定義をもとに, 筆者自身が本稿において意味するところを記した。要点を再記すると, ヨーロッパやアジアの半農半牧の社会における移牧には, 高地, 低地間の移動という「上下」移動の概念が含まれるのに対し, アフリカなどの半農半牧の社会においては必ずしも「上下」という高度差はなくても, 平面的に南北の緯度の差を利用するだけの移動でも移牧と呼んでよいのではないかと, いうことであった。その際, 移動は季節的, つまり定期的におこなわれるものであること, および, 移動先の土地の気候が恒常的な住居をかまえた土地の気候と異なること, という二つの条件を前提に考えていた。このような前提がなければ, むしろ遊牧といった方がよいと思われるからである。

さて, 筆者は本稿において, セネガル, ジョロフ地方に恒常的な村を形成しているフルベ族, ジェンゲルベ・グループについて移牧の事例報告をしたのであるが, 六つの事例のうち三つはジョロフ地方内部での移動にかかわるものである。植生, および年間の降雨量にもとづく地域区分によれば, ジョロフ地方はその全域がサヘル気候帯

に属する。とすれば、「移動先の土地の気候が恒常的な村をかまえた土地の気候と異なる」という前提にはずれており、このような移動をもって「移牧」といえるのかという疑問が生ずるところである。六つの事例のうち、残り3例はいずれもシン・サルーム地方への移動であり、シン・サルーム地方はすでにスーダン気候帯に属する地域なのでジョロフ地方に比べると年間降雨量でかなりの差があるから、移牧とよぶことに問題はないと思われる。

このような問題は「定義」の問題であって、さほどの重要性はないことかもしれないが、第II章で定義をめぐって考察している以上、整理をしておくことが必要であろう。

現在のところ筆者には上記の疑問に答える解答はひとつしかない。それは、ジョロフ地方内部での移動は比較的新しい現象であって、ジェンゲルベ・グループの人々は伝統的にはバオル地方、あるいはシン・サルーム地方など、農耕民ウォロフ族の多い地方に移牧していたはずだ、ということである。前稿 [小川 1980b] にも記したし、また、本稿における事例1、および事例2からもわかるように、ジョロフ地方内部で「移牧」している人は、まず、「移牧」先の場所に動力ポンプによる家畜の水飲み場があることを大きな条件にしている。家畜に水を与えるため深井戸で毎日水を汲む、という辛い労働から解放されることをまず考えている。男手による労働力が少ない家族の場合、乾季の水汲みは容易ではないのである。

しかるに、この動力ポンプによる家畜の水飲み場がジョロフ地方のいくつかの村に設置されたのは1948年以降のことである。これを設置したのは当時のフランス植民地行政府であり、植民地行政府はジョロフ地方の牧畜民定着化政策の一環としてこの動力ポンプ施設を設置したのである。つまり、ジェンゲルベの人々がジョロフ地方内部での「移牧」をしはじめたのは1948年以降のことであると考えてよからう。移牧という生活形態は維持しながらも、自分達が住む同じジョロフ地方内部で短距離の移動をしはじめたということは、とりもなおさず植民地行政府が考えた牧畜民定着化政策が効力を発揮しはじめたということである⁵⁾。

この動力ポンプ施設がジョロフ地方に設置される以前はジェンゲルベ・グループの人々はそのほとんどがバオル地方、シン・サルーム地方のウォロフ族が多く住む地方に移牧していたはずである。本稿の事例1、男Aも本来ならばバオル地方に移牧したいと思ったが、男手は一人で、そのため深井戸での水汲みが困難なため、動力ポンプ

5) 但し、牧民定着化のためにつくられた動力ポンプ施設が40年近くたった現在になって別の問題をひきおこしていることを前稿 [小川 1980b: 707] に記した。

施設のある(ジョロフ地方内部の) Lindé に「移牧」することにした, と述べている。ジェンゲルベの人々は, 雨季, ジョロフ地方においてトウジンビエの耕作をおこなう。しかし, その耕作量は多くはなく, 翌年の雨季まで食べてゆくには不十分な収量しかない。家畜を手放さずに, トウジンビエを手に入れるには農耕民との間で牛乳と穀物の交換をしなければならない。そのために, ウォロフ族が多く住む地方に移牧する必然性があったのである。牧畜民といえども, 彼らの食生活をみると農産物がかなりの比重を占めている。ジェンゲルベの場合, 蒸し煮にしたトウジンビエに牛乳をかけて食べるという食事の形は一年を通じて変わらない。牧畜民は食生活という観点からみれば, 農耕民との相互補完的な交流なしには, あるいは牧畜民自身, 生業形態の一部に農耕をとりいれない限り, 生計維持は困難である。ジェンゲルベの場合, 農耕民との相互補完的な交流は乾季の移牧の時期にこそもっとも活発におこなわれる。その交流は共生とよんでもさしつかえないものである。

1948年, ジョロフ地方に動力ポンプ施設が設置されて以来, ジェンゲルベ・グループの一部の人々は乾季の間も同地方内部での短距離の「移牧」をして暮らすようになった。彼らの伝統的な移牧の形が変わりはじめたということである。しかしながら, たとえジョロフ地方内部での移動であっても, 事例1, 3でみたように, 彼らは伝統的な家, *suudu pulli* を作り, 伝統的なベッド, *leeso* を作っている。雨季には牧畜と同時に農耕をおこなうという生業の形に対し, 乾季の間は牧畜に係る労働だけに従事するという形も変わってはいない。このような意味合いで, 筆者はジョロフ地方内部での移動についても移牧という用語を用いたのである。

文 献

GADEN, Henri

1914 *Le Poular, Dialecte Peul du Fouta Sénégalais*. Tome second: Lexique Poular-Français. Ernest Leroux, Paris.

HOFMEISTER, B.

1961 Wesen und Erscheinungsformen der Transhumance: zur Diskussion um einen agrar-geographischen Begriff. *Erdkunde*, pp. 121-135.

今西錦司

1976 「遊牧論」『今西錦司全集』第二巻(第三刷)講談社, pp. 214-285.

KRADER, Laurence

1955 Ecology of Central Asian Pastoralism. *Southwestern Journal of Anthropology* 11(4): 301-326.

小川 了

1979 「ラオベ・フルベ・ワンバーベ」『民博通信』5: 54-61.

1980a 「牧畜民フルベの生活と水」『季刊民族学』14: 48-59.

- 1980b 「フルベ族の牧畜と農耕をめぐる諸問題——ジェンゲルベ・グループの生業に関する民族誌的研究——」『国立民族学博物館研究報告』5(3): 667-711。
- DE PLANHOL, Xavier
1962 Nomades et pasteurs II. *Revue Géographique de l'Est* 3: 295-318.
- RUDDLE, Kenneth
1979 The Crisis in Dryland Pastoral Economies: An Essay in Applied Human Ecology. 『国立民族学博物館研究報告』4(4): 821-846。
- SPOONER, Brian
1973 *The Cultural Ecology of Pastoral Nomads*. An Addison-Wesley Module in Anthropology, No. 45.
- STENNING, Derrick
1957 Transhumance, Migratory Drift, Migration; Patterns of Pastoral Fulani Nomadism. *The Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland*, 87, parts I & II: 57-73.
- 谷 泰
1976 「牧畜文化考」『人文學報』京都大学人文科学研究所 XLII: 1-58。
- WILLIS, J. C.
1966 *A Dictionary of the Flowering Plants & Ferns*. Seventh ed. Revised by H. K. Airy Shaw, Cambridge Univ. Press.